

文法研究の現状と展望*

張根壽**

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on Japanese grammar

This study collected papers on grammar from Japanese language research journals published in Korea from 2019 to 2020 and examined the papers to explore an overall trend in research. According to topics of the papers, they were divided into research on meanings, forms, and syntax of words; research on grammatical categories; comparative research on Korean and Japanese languages; and research on grammar studies in Japan, and summarized their contents and characteristics.

In Korea, studies of Japanese grammar have been actively conducted especially in the field of applied linguistics that encompasses comparative studies, error analyses, and language typology, as well as in the areas of theoretical research and methodological research for interpreting grammatical phenomena. This is a valid methodological approach to researches on a second language and foreign language education. This study also found papers on various grammatical categories including comparative studies between Korean and Japanese languages based on the traditional one-to-one word correspondence and vocabulary level studies. In addition, there is a trend that the sentence level research, which is one of the typical areas of grammar research, is gradually expanding to the discourse level. This can be interpreted as a movement toward a transition from a research on grammatical phenomena to a research using grammar. Grammar is already used in other fields of research such as grammar education, error analyses, language acquisition, communication, and pragmatics. In the future, it is thought that grammar research will evolve in the direction of discourse and text level studies, and of the application of grammar to various fields.

Field : Syntax

Keywords : Grammatical theory, Grammar study, Grammatical category, Contrastive linguistics, Linguistic typology, Applied linguistics

1. はじめに

日本語学における文法研究は、伝統的に山田孝雄を出発点とする陳述論、時枝誠記の入子型構造による詞辞論、橋本進吉の形式を重視した学校文法を大きな流れとして考えられる。また、奥田靖雄、鈴木重幸の言語学研究会を中心に、橋本進吉の文法論(学校文法)を批判し、それにかわる日本語文法の研究も一方で続いてきた。その後の日本語研究において、具体的な言語形式に見られる文法と意味の記述・解釈が重視されるようになった。それは、言語構造の分析と理論を構築することと同時にそれをいかに提示し、説明するかということが新たな課題になってきたという背景と関連がある。

* This research was funded by a 2021 research Grant from Sangmyung University.

** 祥明大学校 教授, 日本語学・対照言語学

このような立場として、寺村秀夫の文法研究は言語教育・日本語教育と深く結びついている。日本語の形式と意味との結びつきが有している文法的意味・規則性を明示的に提示しようという試みは日本語の記述文法に大きな影響を与え、後の仁田義雄・益岡隆志などの研究に受け継がれている。これにより、文法という理論的研究は記述文法への変化を経て、言語教育(日本語教育)や対照言語学、言語類型論のような応用言語学へとその領域を広げていく。たとえば、日本語教育の分野では言語形式に見られる文法と意味の研究、誤用分析(誤用研究)、野田尚史などの文法教育の分野につながり、日本語文法の知見が中間言語・言語習得、談話分析や語用論など社会言語学の分野にも活発に応用されている。

本稿では、2019年~2020年に韓国で発行された日本語・日本文学・日本学関連の学術誌の中から「文法」を扱った論文を取り上げ、その内容と特徴を記述した。この2年間で発表された文法関連の論文を紹介することで韓国における最近の文法の動向を把握し、今後の文法研究の展望について考える。韓国では、1973年、中等教育において高校の教育課程に第二外国語として日本語が開設された。同じ年に、韓国日本学会の『日本学報』が発行され、1978年には、韓国日語日文学会が設立された。このような動きが韓国での本格的な日本語研究の始まりであると言える。その後、1979年12月『日語日文学研究』第1輯が発行されるなど、たくさんの日本語関連の学会や大学の研究所が設立され、毎年多くの論文が出されている。次の表は、韓国研究財団の登載誌として収録されている日本語・日本文学・日本学関連の学術誌の19種の中、18種をまとめたものである¹⁾。

〈表1〉 調査対象の学術誌および発行論文

発行機関 ²⁾	学術誌	対象巻 (号)	発行回 数(年)	論文総数/ 語学論文数	文法 論文数
韓国日本学会	日本学報	118-125	4回	113/27	5
韓国日語日文学会	日語日文学研究	108-115	4回	137/58	15
韓国日本語学会	日本語学研究	59-66	4回	86/86	19
韓国日語教育学会	日本語教育研究	46-53	4回	96/96	7
韓国日本言語文化学会	日本言語文化	46-53	4回	113/52	23
韓国日本語教育学会	日本語教育	87-94	4回	104/67	13
日本語文学会	日本語文学	84-91	4回	186/78	18
大韓日語日文学会	日語日文学	81-88	4回	151/58	18
韓国日本語文学会	日本語文学	80-87	4回	121/40	9
韓国日本文化学会	日本文化学報	80-87	4回	158/48	12
東アジア日本学会	日本文化研究	69-76	4回	109/26	7
韓国日本近代学会	日本近代学研究	63-70	4回	136/24	9
韓国外国語大日本研究所	日本研究	79-86	4回	81/25	8
檀国大日本研究所	日本学研究	56-61	3回	49/12	3
漢陽大日本学国際比較研究所	比較日本学	45-50	3回	107/28	7
中央大日本研究所	日本研究	50-53	2回	49/19	10
東国大日本学研究所	日本学	48-51	2回	50/10	2
高麗大グローバル日本研究院	日本研究	31-34	2回	49/5	1
計			64回	1895/759	186

1) 大学の研究所が発行している学術誌の中で、翰林大日本学研究所の『翰林日本学』(旧『翰林日本学研究』)は文法関連の論文が見つからなかったため、今回の調査からは除外した。

今回の調査対象とする学術誌の発行機関は12の学会と6つの大学研究所である。この中、韓国日本語学会と韓国日語教育学会はそれぞれ日本語学と日本語教育の分野を専門とする学会である。その他の機関が日本語や日本文学、日本学などの分野に限らず、日本関連の学術誌を発行している現状の中、主に日本語・日本語教育の論文を発行する専門学会であることは注目に値する。学術誌の発行はすべての学会において年に4回、研究所は2~4回発行している。2年間で発行された学術誌は全64編で、総論文数は1895編である。その中、語学論文は759編で約40%を占めている。今回のテーマである文法関連の論文に注目すると、論文数は186編で、全体論文数に比べ文法論文の割合が10%にも満たしていない。このような動きは最近のことではなく、すでに韓国日本語学会の「文法研究の現状と展望」(鄭相哲2017、李景洙2019)でも同様な指摘が見られる。論文総数に比べ文法関連の論文は前回よりも減っており、それは確かな傾向として指摘できる。

それでは、このような現象の原因を探り、どう解釈するかを考える必要がある。まず、文法関連の論文数が減っている理由としては、文法研究の研究領域や関心が移行していると考えられる。伝統的な文法研究では、文の中核をなす動詞文を中心として文の構造やそれと意味関係を結ぶ格の問題、または品詞論を中心とした文法形式の文法と意味を追求する方法論が主流であった。さらに、述語のもつ文法カテゴリーとしてのヴォイスや極性(肯定・否定)、テンス・アスペクトの研究を含め、1990年代に入ってからモダリティの研究が盛んになってきた。文の構造や文法的な関係に焦点をおいてきた従来の文法研究が話し手の態度を表す形式に関心が向けられるようになり、命題の文法からモダリティの文法への文法領域の広がりを見せる。これは、要するに文の最後に位置する部分(文末表現)にまで研究が進められたということであり、文という単位を越えるとテキストや談話の領域になる。結局、文法研究が文から談話にまでその域を拡大したからではないかと思う。

文法は文の統語的な規則を追求する学問で、文法研究の対象とする単位は「文(sentence)」である。ただ、日本語において文の定義はそれほど簡単ではない。たとえば「火事!」「あぶない!」のように、主語のない単語の形で話し手による文としての完結性が認められる。また、文というのも話し手と聞き手とのやりとりの上で成り立つ場合が多く、円滑なコミュニケーションのためには脈略・テキストの働きが重要である。近年の日本語研究において、談話分析(discourse analysis)やテキストを考慮した研究が増えているのも従来の文の領域を越えた試みとして解釈できる³⁾。このような研究の動向を考慮しつつ、本稿では文の構造や原理を中心とした文法研究の動向や展望を記述していく⁴⁾。

2. 単語の意味・形態・統語の研究

単語を意味・形態・統語の観点から分類したものが品詞である。日本語の単語(品詞)に関わる研究と

2) 文法関連の論文数は、文法をどう解釈するか、どこまでを文法とみるかによって、その基準や設定には当然違いがある。

3) 関連する研究として(瀬楽亨(2020)「機能的談話文法における日本語の文法記述に向けて」『日本語文学』87, 韓国日本語文学会)もあった。

4) 文法研究の対象は基本的に文であり、談話分析は言語行動・言語生活・待遇表現のような語用論・社会言語学、そして日本語教育において重要な研究分野である。ここでは談話を中心とする論文は触れないことにする。

しては、動詞(構文)の意味・構文的特徴の記述、形容詞(構文)の研究、副詞や接続詞のような副用語の研究、そして助詞・助動詞の研究などに分類できる。ここでは、動詞と格に関わる研究、形容詞構文の研究、副詞に関わる研究を中心に紹介する。種々の助動詞は次節の文法カテゴリーの研究で紹介する。

日本語は、言語類型論的に韓国語と同じくSOVという語順をもち、名詞に助詞(後置詞)が結合し、動詞に助動詞が結合する膠着語に属する言語である。文の中核となる動詞が文の最後に位置するという特性から、文法研究も当然、文の中核をなす動詞構文を中心として行われてきた。伝統的には動詞の活用をはじめ、動詞の意味構文的な分類、動詞述語文の属性や特徴を中心とした研究がなされている。

- ・魚住泰子(2019)「現代日本語「いる」存在文の時間的限定性における連続性」『日語日文学研究』108, 韓国日語日文学会
- ・権謹玲(2020)「日本語の述語部から見る主観性及び間主観性の一考察 - 述語部の省略と明示を対象として -」『日本学報』123, 韓国日本学会
- ・南美英(2019)「「に格」を取る漢語サ変動詞の連体述語の意味類型」『日語日文学』81, 大韓日語日文学会
- ・上田裕(2020)「認識的变化表現「なっている」の成立条件 - 比較の状況を中心に -」『日本語学研究』65, 韓国日本語学会
- ・李廷玉(2020)「부대상황을 나타내는「ながら」절의 어스펙트 제한 해소에 관한 고찰」『日本近代学研究』67, 韓国日本近代学会
- ・全成龍(2020)「有情名詞+ある에 대하여」『日本研究』52, 中央大日本研究所

上の論文を検討すると、魚住は時間的限定性という概念から「いる」が使われた存在文の分類(一時的・恒常的)による文法的特徴を記述している。動詞構文の意味的特徴として、権謹玲は日本語の主観性および間主観性において、述語の省略と明示、主観性の程度の問題を扱っている。南美英は「に格」をとる漢語サ変動詞と述語との意味類型を分析している。上田は話者が目の前にある二つの対象を比較する状況で「なっている」が成立する条件を状況を認識する観点から説明している。李廷玉は「ながら」節における動詞のアスペクト・過程性の問題を扱っている。

動詞文の研究においては、主語の有情・非情性、動詞の自・他の問題が重要な研究課題とされてきた。千昊載は日本語の中間構文を認知意味論的観点から説明している。韓靜妍は影山(1996)の分析を批判的な立場から、[-e-]型自動詞と[-ar-]型自動詞の意味を記述している。崔瑞暎は文学作品と社会書籍から人主語の他動詞文300例と非情物主語の他動詞文300例を収集し、他動詞文間の比較分析を行っている。

- ・千昊載(2019)「認知意味論的観点から見た日本語の中間構文の研究」『日語日文学研究』109, 韓国日語日文学会
- ・韓靜妍(2019)「日本語の[-e-]型自動詞と[-ar-]型自動詞」『比較日本学』49, 漢陽大日本学国際比較研究所
- ・崔瑞暎(2020)「主語の有情・非情性と他動詞文の表現事態」『日本文化学報』84, 韓国日本文化学会

次の複合動詞に関する研究では、「～つく」と「～つける」の周辺的用法の分析と、その前項動詞に関する記述が見られる。これらの「動詞(連用形)+動詞」型の複合動詞のほかに、「名詞+動詞」型の複合動詞に関する分析として「名詞+づける」の用法と語形成についての分析もある。

- ・大谷由香(2019)「複合動詞「~つく」と「~つける」の研究 - 周辺の用法の特徴を中心に -」『日本語文学』83, 韓国日本語学会
- ・白鍾讚(2020)「付着の意味を表す日本語複合動詞に関する研究 - 「~つく」「~つける」が取る前項動詞を中心に -」『日語日文学研究』113, 韓国日語日文学会
- ・金光成(2019)「「名詞+動詞」型の複合動詞の語形成に関する認知意味論的分析 - 「名詞+づける」の事例分析を中心に -」『日語日文学』81, 大韓日語日文学会

また、動詞と文法的な結合関係をなすものが「主語(ガ格)」や「目的語(ヲ格)」のような「格」の問題である。フィルモア(Charles J. Fillmore)によって提唱された格文法(case grammar)は、述語によって与えられた主語や目的語のような名詞句が果たす統語的な機能の文法関係を研究対象としている。「ガ」「ヲ」のような主格・体格やその他の状況を表す種々の格と動詞との結合関係は典型的な文法領域の一つである。今回の調査では「ヲ」と「ニ」格が目立つ。

- ・荻原左江子(2019)「対格助詞「ヲ」をめぐる」『日本研究』79, 韓国外国語大日本研究所
- ・申貞恩(2020)「二重目的語構文の語順と要因について - 文章産出タスクの結果から -」『日本学報』124, 韓国日本学会
- ・申義植(2020)「期間を表す「を」と状況を表す「中を」の文法的な特徴と機能について」『日本言語文化』50, 韓国日本言語文化学会
- ・李炫雨(2020)「格助詞「に」の意味と用法に関する研究」『日本語文学』89, 日本語学会
- ・朴江訓(2020)「統語論的観点からみた「ニ格」」『日本文化学報』84, 韓国日本文化学会

対格助詞「ヲ」では、談話において他動詞目的語「ヲ」の出現の様相を語順との関係から説明している。「二重目的語構文」では、母語話者39人のインフォーマント調査を通して、二重目的語構文の語順と要因を分析している。格助詞としてのヲ格の他に、副詞格(secondary case)としての期間や状況を表す「ヲ」の特徴と機能を記述しているものもある。また「ニ」の研究において、李炫雨は従来の格研究において述語中心説を認めながらもそれに加えて格助詞「に」の前に付く名詞の性質の違いによっても多用な用法が出てくるという立場をとっている。朴江訓は統語論的観点から「ニ格」を文法格と副詞格を区別する統語的テストを多重NPI(Multiple Negative Polarity Item)と関連づけて分析している。次の論文では、副詞と動詞の名詞としての用法、否定と共起する指示詞の問題を扱っている。

- ・朴智娟(2019)「日本語オノマトペの名詞用法に関する意味的研究 - 副詞・動詞・形容動詞が名詞用法として機能する場合 -」『日本学研究』58, 檀國大日本研究所
- ・蔡盛植(2020)「일본어 경어표현에 등장하는 전성명사에 관하여 : 용언에서 체언으로의 전성을 중심으로」『日本語教育』90, 韓国日本語教育学会
- ・金英敏(2020)「부정과共起하는 지시사의 의미와 용법—「そんな/そんなに」의 이중적 기능을 중심으로—」『일본연구』제51집, 중앙대학교 일본연구소

朴智娟は日本語オノマトペの中で名詞として用いられるものを対象に認知言語学的な観点のフレーム意味論からその意味の分布や意味形成の仕組みを説明している。蔡盛植は「お出かけ・お決まり」のよ

うな表現を対象に転成という現象からその成立の背景と文法的特徴、敬語としての機能と位相の問題を扱っている。金英淑は「そんな/そんなに」を通して、否定表現としての特性と様相を記述している。

- ・高恩淑(2019)「페어로 공기하는 일본어 형용사의 의미관계 고찰 -반의관계를 중심으로-」『日本研究』79, 韓国外国語大日本研究所
- ・高草木美奈(2019)「「幸福な/幸せな/ハッピーな」の一考察 -被修飾語のうちモノ名詞を中心に-」『日本語教育研究』47, 韓国日語教育学会
- ・朴海煥(2020)「「親疎関係」を表す形容詞述語文の文型と用法」『日本研究』52, 中央大日本研究所

上は、形容詞構文の意味・文法的な関係、形容詞・動詞の活用の問題を扱っている。高恩淑はコーパス資料から一つの文内でペアで共起する形容詞の対義関係を中心にその意味的特徴を分析している。高草木は「幸福な/幸せな/ハッピーな」の異なる語種の形容詞と共起する被修飾語(名詞)を分類している。

さらに、次の接尾辞「-くさい」がヒト名詞に付く場合のプラス・マイナス評価性について、「にくい・づらい・がたい」のように形容詞接尾辞の意味・用法を記述している。

- ・鈴木梓(2020)「現代日本語における接尾辞「-くさい」の用法 -ヒト名詞を中心に-」『日本語教育』91, 韓国日本語教育学会
- ・韓奎安(2020)「「にくい」「づらい」「がたい」의 의미·용법 고찰」『日本研究』52, 中央大日本研究所

日本語学においては、副詞(副用語)についても活発な研究が続いている。伝統的には山田孝雄の情態副詞・程度副詞・陳述副詞が副詞の三分類として分けられている。次の李羽濟、趙恩英ではコーパス資料を用いて副詞の意味的な違いと使用様相について分析している。

- ・李羽濟(2019)「コーパスに見られる「ほんとう」の使用」『日本語学研究』62, 韓国日本語学会
- ・趙恩英(2019)「「一生懸命に」・「熱心に」の違いについて -『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて-」『日本文化学報』83, 韓国日本文化学会
- ・高橋美保(2020)「副詞「たしかに」の二つの機能 -形容詞から副詞へ-」『日本言語文化』51, 韓国日本言語文化学会
- ・全成燁(2019)「推定のモダリティ副詞と文の事態内容に対する話し手の認識的判断 -「どうも」「どうやら」「よほど(よっぽど)」を話し手情報の観点から-」『日語日文学』84, 大韓日語日文学会
- ・韓先熙(2020)「「必ず」「きっと」「ぜひ」「絶対」の使用実態について -韓国人日本語学習者を対象に-」『日本語文学』84, 韓国日本語文学会

また、陳述副詞(文副詞・叙法副詞・モダリティ副詞)と分類されるものである。高橋では「たしかに」は様態副詞と陳述副詞の二機能があること、両用法は文法的にも語彙的にも異なる特徴が見られることを指摘している。全成燁は「推定」に属する副詞が小説のデータで現れる様相を話し手の情報の観点から述べている。韓先熙は韓国人日本語学習者を対象とした調査から類義関係にある副詞の使用実態を分析している。

3. 文法カテゴリーに関する研究

述語は様々な文法カテゴリーを帯びている。たとえば肯定と否定(極性・みとめ方)、「ル・タ」のテンス、「デス・マス」の丁寧さ、「ダ・ダロウ」の断定・推量の認識のモダリティは動詞を含め、形容詞・名詞述語にも現れる。動詞文に見られる文法カテゴリーとしては「(ラ)レル」「(サ)セル」のヴォイス、「ル・テイル」のアスペクトが挙げられる。ただ、動きを表す動詞文に限ってアスペクトの対立があり、可能・意志や命令を表すことができる。

3.1 命題の文法

文の意味を大きく客観的な部分と主観的な部分の二つに分ける考え方は、英語・日本語の研究を問わず、認められている。英語の研究では‘dictum’と‘modus’、‘proposition’と‘modality’という用語で分けられ、日本語においては古くから時枝誠記の「詞」と「辞」、渡辺実の「素材」と「叙述・陳述」、鈴木重幸の「ことがらの」と「陳述的」、三上章・寺村秀夫の「コト」と「ムード」、仁田義雄の「言表事態」と「言表態度」などに分類されている。ここでは、述語の文法カテゴリーの中、命題に関わる研究を紹介する。

- ・安平鎬・池好順(2019)「타동(他動)과 사역(使役)의 경계 - 日本語教育적인 관점에서 -」『日本文学』118, 韓国日本学会
- ・権裕羅(2019)「日本語の感情形容詞と感情動詞の使役表現をめぐって」『日本語教育』86, 韓国日本語教育学会

上の論文では属性形容詞・感情形容詞を対象に「形容詞+する」「形容詞+させる」、また「形容詞+ガラセル」「動詞+セル」構文の使用基準、および意味の違いと特徴について記述している。次は「(ラ)レル」に見られる受動(受身)と可能の用法を指摘している。

- ・金俸呈(2020)「現代日本の新聞における間接受身文の統語的な特徴に関する研究」『日語日文学研究』112, 韓国日語日文学会
- ・朴鍾升(2020)「현대일본어에서의 조동사 (ら)れる의 용법」『日本語文学』89, 日本語文学会

まず「間接受身文」においては、4種類の日本の新聞の実例を対象に、記事の性質による間接受身文の構文・意味的性質を分析している。そして、現代日本語の「(ら)れる」の用法においては動詞の種類によって分布に偏りがあり、子音語幹動詞には受身用法が、母音語幹動詞には可能用法が多いことを指摘している。次は補助動詞構文に関する論文である。

- ・金秀榮(2019)「授受の補助動詞「てくれる」と「てもらう」の使い分けに関する研究 - 構文的な観点を中心に -」『日語日文学』84, 大韓日語日文学会
- ・朴用萬(2019)「한일 수익구문(受益構文)의 조사삽입 현상」『日本語教育』87, 韓国日本語教育学会
- ・宋恵仙(2020)「直接のやりもらい構文の構造 - 連語論の観点から -」『日本文化研究』76, 東アジア日本学会

- ・金熹成(2020)「자발적 상황을 나타내는 「~てしまう」」『日本語学研究』63, 韓国日本語学会
- ・裴銀貞(2020)「効力を表す「~テアル」構文とパーフェクトの「~テイル」構文とのニュアンスの違いをめぐって」『日語日文学』87, 大韓日語日文学会

授受動詞(やりもらい)の研究では、動詞の使い分けと構文の構造について分析している。そして「~テシマウ」については、自発的な状況を表す用法があることを主張し、その意味・構文的な特徴について説明している。「テアル」構文の研究では、「テイル」と置き換えられる構文を対象にお互いの「効力」の意味合いにおけるニュアンスの違いとその理由を記述している。次は複文において接続表現に関する研究である。

- ・朴敏瑛(2019)「現代日本語の「-しないうちに」の意味分析 - 「-するうちに」との違いを中心に -」『日本研究』82, 韓国外語大日本研究所
- ・方允炯(2019)「名詞に接続する「せいで」の意味と機能」『日語日文学研究』110, 韓国日語日文学会
- ・井口有子(2020)「接続助詞カラとノデから考える 原因と理由の別について」『日本言語文化』52, 韓国日本言語文化学会
- ・黄允實(2020)「「逆接」を表す「V(-タ)トコロデ」と「V(-タ)トコロガ」 - 順接用法とのかかわりからみた比較 -」『日本研究』83, 韓国外語大日本研究所

まず「-しないうちに」は、否定形に接続する特徴により、特定の〈限界〉を焦点化するために、〈とき〉の捉え方などにおいて「-するうちに」とは質的に異なると主張する。次の名詞に接続する「せいで」は単文と複文に分け、「せいで」が望ましくない結果を表す場合だけでなく、望ましい結果を表す場合やその組み合わせの場合があることを指摘している。井口はカラとノデの区別において、カラは主に行動の理由(スル理由)を表し、ノデは主に物事の生起する原因(ナル原因)を表すものとして区別している。最後の逆接の表す「ところ」は、空間概念を表す名詞が時間概念を表すもので、意味的に抽象化・脱名詞化した「ところ」が助詞と結合して接続助詞の用法として使われていることを指摘している。これは、ある語がもつ語彙的な意味が薄れ、機能語として働くということで文法化の現象としても捉えられる。

文法化(grammaticalization)とは、語彙的な意味を表す名詞、動詞などのような内容語が機能的な意味を表す助詞や接続詞、助動詞といった機能語として用いられるように変化する現象をいう。文法化は言語の普遍的な現象で、たとえば日本語の過去を表す「タ」は「てありゝたりゝた」という歴史的変化を経ているが、韓国語の「-았」においても「어 있ゝ었ゝ았」のような同様な変化過程が見える。両言語とともに存在動詞としての語彙の意味が過去という機能を表すことばに変化している。文法化と関連する研究としては次のものがあつた。

- ・金廷珉(2020)「「든지」の脱従属化と日本語の対応形式に関する分析」『日本語学研究』65, 韓国日本語学会
- ・河在必(2020)「脱動詞化にみられる文法的な意味と機能の存続 - 動詞条件形の脱動詞化を中心に -」『日本研究』51, 中央大日本研究所

韓国語の選択の意味を表す語尾である「든지」が日本語では条件節を構成する「ば/たら」が脱従属化され、提案や勧誘、命令などの聞き手への行為要求としての意味の拡張を説明している。脱動詞化に

については「いえば/いうと/いっても」のように、動詞条件形から文法的な機能を果たす形式への脱動詞化と動詞条件形の文法的な側面を説明している。

- ・金殷模(2020)「「発見のタ」におけるタの意味」『日本学報』122, 韓国日本学会

最後に、命題とモダリティに境界的用法とも言える「ムードのタ」に関する論文もあった。「タ」の用法を「目的実現」と「期待実現」の二つに分類し、完了の意味との関係性を主張している。

3.2 モダリティの研究

文には客観的な内容を中心とする「命題」と、話し手の主体的態度を表す「モダリティ」の側面があることは、いろいろな角度から論じられてきた。モダリティは文全体の帯びている意味論的なカテゴリーであり、ムードという用語は、モダリティを表し分けるための形態論的なカテゴリーとして用いられている。

日本語におけるモダリティの研究は1990年代から盛んになりはじめたが、その背景には命題の文法からモダリティの文法への研究領域の拡張と解釈することができる⁵⁾。韓国においてもモダリティの研究は活発に行われている。

- ・權城(2019)「「だろう」と「かも(しれない)」の語用論的な用法文の情報優位 - 情報のなわ張り理論に基づいて -」『日本語文学』80, 韓国日本語文学会
- ・鄭相哲(2020)「「ノダロウ」と「ラシイ」の異同について」『日本語文学』91, 韓国日本語文学会
- ・金昌男(2019)「日本語の様態の「そうだ」の使用実態について」『日本語文学』82, 韓国日本語文学会
- ・李恩美・鄭相美(2020)「「みたいだ」의 담화상 용법 - 자연대화와 일본어 교과서 분석을 중심으로 -」『日語日文学研究』114, 韓国日語日文学会
- ・成昊炫(2019)「「はずだ」の推量特性について」『比較日本学』45, 漢陽大日本学国際比較研究所
- ・金蘭美・金庭久美子・金玄珠(2019)「日本語メール文に見られる伝聞表現 - 相手からの情報を前提情報とする場合 -」『日語日文学』84, 大韓日語日文学会

仁田のモダリティの分類では、発話・伝達のモダリティと命題めあてのモダリティに分けられ、命題めあてのモダリティは、認識のモダリティと当為評価のモダリティに下位分類される。今回の調査では、上の「ダロウ/カモシレナイ/ラシイ/ソウダ/ミタイダ/ハズダ」のような認識のモダリティ(epistemic modality)の意味用法に関する記述的研究が目立つ。伝聞表現の研究では日本語母語話者に比べ日本語学習者は伝聞形式の使用があまり見られないことを指摘している。

- ・金恵娟(2020)「名詞修飾「べき」の意味特徴」『日本語教育研究』52, 韓国日語教育学会
- ・梁乃允・李吉鎔(2019)「韓国入学者の普通体の話しことばにおけるノダ - 丁寧体の話しことばとの比較を中心に -」『日本研究』51, 中央大日本研究所

5) モダリティ研究の先駆的なものとして、仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、益岡隆志(1991)『モダリティの文法』が出版された。

- ・飯干和也(2020)「韓国語日本語学習者の意見文における「のだ」の使用について」『日本文化学報』86, 韓国日本文化学会
- ・呉先珠(2019)「日本語依頼表現の丁寧さ - 授受表現「てくれる・てもらう形」「させてくれる・させてもらう形」を中心に -」『日本文化学報』79, 韓国日本文化学会
- ・白松宗(2019)「「からして」「さえ」「まで」における他者の特徴」『日本語学研究』62, 韓国日本語学会

また、「ベキダ」のような当為評価のモダリティ(行為的モダリティ・deontic modality)形式の特徴や学習者の使用の問題に関する研究もあった。「ノダ」の研究では、韓国語学習者の話しことばにおけるノダの使用様相と、意見文を調査対象に用いた韓国語学習者の「のだ」使用調査とが見られる。依頼表現の研究では、依頼の場面に用いられる敬語表現のうち、「てくれる・てもらう形」「させてくれる・させてもらう形」を中心に日本語母語話者20人を対象にアンケートを行った結果を提示している。とりたて助詞とモダリティの関係では「自者と他者」「前提と含み」が問題になるが、ここではこれらのとりたて助詞の意味的特徴である意外性を記述している。

- ・廉美蘭(2019)「文末表現「Pたりして。」の一考察 - 認識的モダリティの観点から -」『日本文化学報』81, 韓国日本文化学会
- ・吉田玲子(2019)「「ってば」に関する考察」『日本文化研究』70, 東アジア日本学会
- ・全紫蓮(2019)「現代日本語における副詞の感動詞用法をめぐって - 「ちょっと」の主観化を中心に -」『日本言語文化』46, 韓国日本言語文化学会

さらに、ある形式が文末や特定の位置に立ち、モダリティの意味を表す場合がある。談話によって頻繁に用いられる形式が特定の誤用論的な意味を表し、それが慣用化した表現として用いられる。廉美蘭は「たりして」が認識的モダリティの一形式として、極端な例の一つの可能性を表す可能性判断として捉えている。吉田では会話文で用いられる「ってば」の「主題提示用法」や「終助詞用法」のようないくつかの用法に分け、それを連続的に捉えている。全紫蓮は「ちょっと」の例から副詞が感動詞化する現象を説明している。程度を表す副詞が強調の意味を経て感動詞へと意味を拡張していく現象はしばしば指摘されているが、これも文法化の現象として説明できる。

4. 日韓両言語の対照研究

韓国における日本語研究のような言語研究・外国語教育においては、対照研究、誤用分析、中間言語という研究の流れに注目する必要がある。対照研究(contrastive study)は、複数の言語体系を比較し、その違いを中心に対象とする諸言語の特徴を明らかにするものである。対照研究の初期(1950・1960年代)の頃は、目標言語(L2)と母語(L1)との違いを把握し、そこから母語の干渉(interference)が予測でき、外国語教育に役立つものと考えられた。しかし、対照研究における予測と学習者の誤りが必ずしも一致しない現象も現れることが分かった。

言語の類型的な側面からみると、英語のような屈折語(孤立語)と日本語・韓国語の膠着語は文の構造

において異なる部分が多く、母語にはない文法要素を習得するのは難しい。たとえば、英語の冠詞や関係代名詞の習得にはかなり時間にかかり、当然誤用が起こると思われるが、習得の難しさと誤用が一致するとは限らないし、実際にはその要素を避けて使うこともある。つまり、学習者の誤りには多様な要因があるため、対照研究には限界があるとされた。これにより注目されたのが誤用分析(error analysis)という方法である。誤用分析(研究)とは、学習者の誤りにはどのようなものがあり、どうして誤りが発生し、どう訂正するかを考えることで、言語教育に役立てようとする研究方法である。誤用分析は第二言語習得の理論をはじめ日本語教育に貢献でき、教材の作成・開発、教授法への応用などで活用されている⁶⁾。

学習者の誤りに注目したのが誤用分析の特徴であるが、さらに学習者の誤りは学習の段階において当然起こる現象であり、その誤りにも一定の規則や体系があるという考え方がシェリンカー(Selinker, 1972)による中間言語(inter-language)という立場である。中間言語は習得段階において変化していくものであり、対照研究の立場からすると、言語間の干渉により当然起こるはずの誤用が起こらなかったり、母語の違う学習者にも共通的に誤用が起こる現象もあった。言語習得には普遍的な学習順序が存在するという考え方から、学習者共通の言語体系としての中間言語が存在すると考えられた⁷⁾。

このような言語研究・外国語教育の流れからすると、対照研究には限界があり、有効性が疑われるように思われるが、対照研究は外国語教育において依然として有効であり、言語学習上の問題点を提示し、その問題を解明する上でもきわめて重要な研究方法として使われている。また、世界の諸言語を対象に、一般の傾向を定式化・類型化することを目的とする言語類型論(linguistic typology)も、対照言語学とは目的や方法は異にしながらも、相互に大きく貢献している分野である。さらに、対照言語学・言語類型論は言語の普遍性と個別性という理論的な問題を説明する方法としても広く使われている。

今回の調査では日韓の対照研究の分野と対象が幅広くなったということが確認された。以下の論文は、日韓両言語の動詞の意味的な違いのような1:1の対応関係の異同を分析している。たとえば「見

6) 紙幅の都合上、詳しくは説明できないが、文法教育に関する論文をいくつか紹介する。

- ・ 송수진(2019) 「한국의 일본어문법교재에 나타나는 「わけだ」의 교육에 관하여」 『日本言語文化』 49, 韓国日本言語文化学会
- ・ 공미희・손동주(2020) 「일본어 동사의 문법적 오용분석을 통한 일본어 교육에의 활용방안」 『日語語文学』 87, 大韓日語語文学会
- ・ 오현정(2020) 「문법평가문항 개발 방향성에 관한 고찰 : 대학수학능력시험 일본어 I 을 대상으로」 『日本語教育研究』 51, 韓国日語教育学会
- ・ 장근수(2020) 「형용사・동사활용형의 명칭 및 제시 범위에 대한 고찰 - 2015개정 교육과정 일본어 I 교과서를 대상으로 -」 『日本語教育』 92, 韓国日本語教育学会
- ・ 윤강구(2020) 「일본어교육에서 다루어야 할 문법」 『日本語教育』 93, 韓国日本語教育学会

7) 紙幅の都合上、詳しくは説明できないが、文法に関わる中間言語・言語習得の論文をいくつか紹介する。

- ・ 趙鍊徹(2019) 「初級日本語教材に現れる日本語条件表現「と・ば・たら・なら」の学習過程に関する分析」 『日本語教育』 89, 韓国日本語教育学会
- ・ 尹祥漢(2019) 「일본어학습자의 문법습득에 관한 종단적 연구 - 격조사 「に・で」의 사용을 중심으로 -」 『日語日文学研究』 110, 韓国日語日文学会
- ・ 黃永熙(2019) 「일본어 아스펙트 표현의 습득, 유지, 마멸, 상실 그리고 재구성」 『日本語学研究』 59, 韓国日本語学会
- ・ 崔延朱(2020) 「학습 환경이 다른 일본어 학습자의 「が・けど」의 중간언어의 생성에 관한 연구 - 학습 레벨에 따른 습득의 차이를 중심으로」 『日本研究』 85, 韓國外国語大日本研究所
- ・ 신은정(2020) 「일본어 수동태 학습과정에서 보이는 모어의 영향 - 한국인 학습자의 인식조사를 바탕으로 -」 『日本文化学報』 84, 韓国日本文化学会

る」と「보다」のような対義語としての動詞の対照が典型的な方法であると言える。

- ・董素賢(2019)「日本語動詞「見る」と韓国語動詞「보다」の対照研究 - 語彙的な意味と構文的要因の相関性を中心に -」『日本語教育研究』48, 韓国日語教育学会
- ・徐順珪(2019)「位置づけの意味を表す「置く」と「두다」「놓다」の意味対照 - 認知言語学の意味拡張の観点から -」『日語日文学』82, 大韓日語日文学会
- ・洪榮珠(2020)「인지언어학적 관점에서 바라본 한국어 ‘가다’ 동사와 일본어 ‘いく’ 동사의 대응관계」『日本文化研究』74, 東アジア日本学会
- ・劉恩聖(2020)「한·일 동사 연어의 대조연구 - 「안다/품다」와 「イダク/カカエル」를 중심으로 -」『日本研究』80, 韓国外国語大日本研究所
- ・李忠奎(2020)「「残る・残す」と「남다・남기다」の日韓対照研究」『日本語教育』92, 韓国日本語教育学会

また、次のように日韓の複合動詞に注目して後項動詞「つける/붙이다」の研究や、移動動詞「行く/来る」と「kata/ota」、補助動詞の研究では「-てみる」と「-어 보다」、「てくる/어 오다」「てくれる/어 주다」の比較に関する論文があった。単語レベルではなく、語彙レベルでの対照研究も見られる。澤田では韓国語・日本語の擬態語の中で、やわらかさを表すものを対象に副詞的用法を比較している。金良宣は接続詞の研究として、書き言葉における「だから」の意味用法について記述している。

- ・金秀東(2020)「日韓複合動詞組み合わせ特徴の対照分析 - 後項動詞「つける・붙이다」を中心に -」『日語日文学』87, 大韓日語日文学会
- ・韓京娥(2019)「実例に見る「行く/来る」と「kata/ota」 - 話し手と到着点との関係に注目して -」『日本学報』119, 韓国日本学会
- ・成知炫(2020)「「-てみる」と「-어보다」の韓・日対照研究 - 両形式が対応しない場合を中心に -」『日本語学研究』66, 韓国日本語学会
- ・屋敷陽子(2020)「方向性を表す補助動詞の日韓対照研究から見る学習者の問題点 - 「てくる」「てくれる」と「-어 오다」「-어 주다」を対象として -」『日語日文学』88, 大韓日語日文学会
- ・澤田信恵(2020)「韓国語・日本語のやわらかさを表す擬態語の副詞的用法に関する考察」『比較日本学』48, 漢陽大日本学国際比較研究所
- ・金良宣(2020)「문장체에서의 접속사 「다」 - 한국어 대응을 중심으로 -」『日本語文学』88, 日本語文学学会

対照研究は言語の語彙の意味に限らず文法的な性質の違いの究明にも用いられる。次の研究では日韓両言語における文法形式の違いについて分析している。まず、助詞の研究として、金榮敏は韓国語と日本語のテキストにおける主語の実現の違いを、申義植は助詞「ㄱ」と「ㄴ」が期間や状況を表す付加詞用法としての共起制限の違いを説明している。また「もの」と「こと」、「것/일」の文法化の違い、新聞社説に見える指示詞の使用様態の様相に関する論文もあった。

- ・金榮敏(2019)「한국어와 일본어의 주어 실현 양상에 대한 일고찰」『日本学』49, 東国大日本学研究所
- ・申義植(2020)「日韓両言語の助詞「ㄱ」と「ㄴ」の付加詞用法について - 翻訳した時の許容度と意味を中心に -」『日本語文学』90, 日本語文学学会

- ・崔真姫(2020)「『もの』と『こと』의 문법화에 관한 고찰 - '것'/'일'과 대조하여 -」『日本文化研究』76, 東アジア日本学会
- ・井ノ上佐織(2019)「テキストにおける指示詞の使用様態に関する日韓対照研究 - 新聞社説の分析を中心に -」『日本学報』118, 韓国日本学会

また、テンス・アスペクトの研究として、金庚洙は時間を示す相対名詞の指示機能が各言語のごとに一致していないことを一般性の拡張(文法化)として記述している。鄭相哲は韓国語と日本語の継起的な連体節を対象にテンス・アスペクトの意味・文法的特徴を説明している。否定極性表現に関しては、「밖에/뿐이」と「しか/ほか」の統語的特徴を方言接触の観点から説明している。

- ・金庚洙(2019)「相対名詞の語彙的なアスペクトの関係 - 韓国語の「전」と日本語の「前(マエ/ゼン)」をめぐって -」『日本言語文化』46, 韓国日本言語文化学会
- ・鄭相哲(2020)「継起的な連体節のテンスとアスペクトについて - 韓・日対照研究を中心に -」『日本研究』85, 韓国外国語大日本研究所
- ・朴江訓(2019)「韓日両言語の方言接触における対照研究 - 否定極性表現の場合を中心に -」『日本文化学報』82, 韓国日本文化学会

次のモダリティに関する日韓対照研究として、權成は例の認識的モダリティ形式が1:1の対応ではなく、韓国語のどのような表現で現れているかを指摘している。劉豎眞は談話上の形式である「ていうか」とそれに当たる韓国語との対応関係を分析することによって「ていうか」の性質を説明している。また、表現・敬語使用の対照研究として、依頼表現における様々な文末表現の様相や「させていたたく」とそれに当たる韓国語を対象に敬語使用の問題を指摘している論文もあった。

- ・權成(2019)「日韓対照研究の一考察 - 「だろう」「かも(しれない)」「はずだ」を対象に -」『日本文化学報』82, 韓国日本文化学会
- ・劉豎眞(2020)「口語表現に関する日韓対照一考察 - 「ていうか」と韓国語との対応関係 -」『日語日文学』87, 大韓日語日文学会
- ・金楨憲(2020)「韓・日「依頼表現」一考察 - 文末表現を中心に -」『日本言語文化』50, 韓国日本言語文化学会
- ・佐々紘子(2019)「「～(さ)せていただく」「-(으)시-」「-(으)실게요」の使用に関する考察 - 敬語使用の変化と間主観化の観点から -」

以上の研究から対照研究の領域が単語・語彙レベルから文型・表現にまで広がっていることを確認した。談話の研究においても対照研究は活発に行われているなど、このような多様な分野での研究方法は今後も増えていくと思われる⁸⁾。

8) 談話の研究の中、文法に関する対照論文は次のものがあつた。

- ・一色舞子(2019)「日本語母語話者と韓国人日本語学習者による終助詞「よ」の使用実態 - 談話完成テストの調査結果に基づいて -」『日本近代学研究』64, 韓国日本近代学会
- ・林始恩(2019)「日本語と韓国語の発話の冒頭における談話標識について - いやと아니(ani)を中心に -」『日本語文学』80, 韓国日本語文学会
- ・沖裕子・姜錫祐・趙華敏(2019)「日韓中対照からみた日本語の談話構築態度 - 発想と表現の差を説明する

5. 日本の文法研究の動向

この節では、2019~2020年に日本で開かれた学術大会の内容を中心に紹介する。対象とする学会は、日本語の研究においてもっとも専門的な学会とされる日本語学会・日本語文法学会、日本言語学会の三つである。

「日本語学会」 2019年5月19日(甲南大学)、「現代語 - 古代語 対照文法の可能性と課題」というシンポジウムが開催された。その内容の一部を引用すると「1990年代にやや停滞したかにみえた古代語(上代語・中古語)文法研究は世紀が変わる前後ころから、多くの若手研究者が登場して活況を呈し、現在に至っている」と説明している。また、2019年10月27日(東北大学)の学術大会では「社会変動の中の日本語研究—学の樹立と展開—」というタイトルのシンポジウムが開催された。

2020年10月24日・25日(Zoomウェビナー)、4つのワークショップ(「言語習熟論へ向けて—日本語研究と国語教育・初年次教育など—」「国文学研究資料館の情報資源の日本語学研究への活用」「奥田靖雄構文理論の継承と発展」「『日本語歴史コーパス』活用入門」と、「データから見る日本語と「性差」」というシンポジウムが開かれた。シンポジウムの一部の内容を引用すると、「現代では、言語的実態を捉えるための様々な手法、コーパス類などデータの蓄積、そしてそれを支える最新の理論に拠って、言語使用の実態をこれまで以上の精度で観測することが可能になりつつある。これらの資料や方法を用いることが、日本語の「性差」を、現時点においてどのように記述すべきなのかという議論の契機となるのではないかと考える。」となっている。

「日本語文法学会」 2019年12月7日・8日(学習院大学)、第20回記念シンポジウム『日本語文法研究の射程』が開催され、20編の研究論文が発表された。パネルセッションでは「日琉諸方言の格と情報構造」が行われ、「言語類型論と周辺諸言語から見た日本語形態法」というテーマでチュートリアルが実施された。この大会では、学会設立20年を記念し、文法研究の進展と今後の研究の課題や希望を提起した。研究の歴史の長い「受身」をテーマに、講演者それぞれの研究立場(分野・方法・視点)から、「受身文研究の現在地」というタイトルで講演会が行われた。

2020年12月12日・13日(Zoomミーティング)の学術大会では17編の研究論文が発表され、「オンライン授業として展開する日本語学」「「ヴォイス」について考える—ラル形述語文の検討から—」というタイトルでチュートリアルが開かれた。13日(Zoomウェビナー)には「数理的アプローチで迫ることばの姿：これまでの取り組みと文法への応用」というタイトルで、第21回シンポジウム(言語系学会連合共催)が開かれた。言語の諸側面に対し数理的に迫ろうという試みとして、コンピューターや機械学習を用いた言語分析についての議論があった。

「日本言語学会」 2019年6月22日・23日(一橋大学)、公開シンポジウムとして「アспект研究の新しい視座としての「テイル」研究—日本語学から一般言語学への貢献—」が開かれ、2019年11月16日・17日(名古屋学院大学)、公開シンポジウムとして「AIによって揺さぶられる言語理論—一意味論の観点か

モデルの検討—」『日本研究』50, 中央大日本研究所

・全鍾美(2019)「ディスカッション場面における共感要求表明の日韓対照研究」『日語日文学』84, 大韓日語日文学会

ら一」が開かれた。

2020年11月21日・22日には、Noam Chomsky (University of Arizona/MIT)の公開講演「Minimalism: where we are now, and where we are going.」が開かれた。要旨を以下に紹介する。

In this lecture, we assess the current state of the minimalist inquiries in the generative linguistics, reviewing their historical and philosophical backgrounds, and project some prospects and possible directions for the further progress, demonstrating some imminent challenges and obstacles. With time permitting, we will see some recent technical developments that accord with the minimalist desiderata for the generative linguistics. (この講義では、生成言語学におけるミニマリストの調査の現状を評価し、それらの歴史的および哲学的背景を確認します。それから、いくつかの展望とさらなる進歩のための可能な方向性を予測し、いくつかの差し迫った課題と障害を示します。時間が許せば、生成言語学のミニマリストの欲求と一致するいくつかの最近の技術開発を紹介します。)

この2年間の学術大会の内容をみると、伝統的な文法のテーマである「格」「受身」「アスペクト」に関する内容が議論される一方で、古代語と現代語の対照研究や社会の変動の中での日本語の役割や課題、性差(ジェンダー)の問題、コンピューターを用いた言語研究、AIと言語理論など、幅広い分野でシンポジウムやパネルセッションが行われた。

次に、2019-2020年に発行された3つの学術誌の中から、いくつかの論文を紹介する。文法関連の論文はさすがに日本語文法学会の学術誌が多かった。

- ・古賀悠太郎(2019)「対話の場面で「太郎は嬉しい」が可能になるとき - 人称制限はどのような場合にどの程度解除され得るか -」19巻1号, 日本語文法学会
- ・李泓璋(2019)「「(よ)うとする」に関する一考察 - 母語の知識を活かした日本語教育の観点から -」19巻2号, 日本語文法学会
- ・保田一充(2019)「到達構文としての名詞文 - 動的事態指向の修飾表現と静的表現との結合事例 -」19巻2号, 日本語文法学会
- ・浅原正幸・小野創・宮本エジソン正(2019)「BCCWJ-EyeTrack - 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する読み時間付与とその分析 -」『言語研究』156号, 日本語言語学会
- ・井上直美(2020)「「彼は笑ってみせた。」は何を見せたか—書き言葉の「てみせた。」の意味機能に注目して—」『日本語の研究』第16巻1号, 日本語学会
- ・三好優花(2020)「日本語母語話者は「(よ)うと思う」をいつ使うのか: 日本語教育の観点から」20巻2号, 日本語文法学会
- ・宮腰幸一(2020)「日本語受動の類型論」『言語研究』第157号, 日本語言語学会

論文の中では保田(2019)、宮腰(2020)など伝統的な構文の研究が多かったが、古賀(2019)の「太郎は嬉しい」のような感情形容詞の三人称主語の問題、李泓璋(2019)、三好(2020)の構文の意味と使用を日本語教育の立場から記述している論文もあった。井上(2020)の「-てみせる」構文も韓国語にもそのまま適用されるので、対照研究として応用できると思われる。最後に、BCCWJのコーパスは日韓ともに研究の資料として活発に用いられている⁹⁾。

6. おわりに

本稿では、2019~2020年に発行された韓国の日本語関連の学術誌から文法の論文を取り上げ、その現状を把握した。論文を類型別に、単語の意味・形態・統語に関する研究、文法カテゴリーに関する研究、日韓対照研究、日本の文法研究の動向に分けてその内容と特徴を記述した。

韓国における日本語文法の研究は文法現象を記述・説明する方法論を含め、日韓の対照研究が活発に行われていることを確認した。これは母語でない第2言語としての言語研究・外国語教育という側面からも妥当な方法論であると言える。今回の調査からは特に、日韓の対照研究の伝統的な単語の1:1の対応形式の研究から語彙レベルの研究を含め、多様な文法カテゴリーに関する研究が進められていることを確認した。

韓国における日本語研究はこの2年間で発表された論文数からみると依然として活発に行われているが、その中、文法関連の論文は減少の傾向を見せている。それは文法研究の方法論の変化および多様性に関わっていると考えられる。対照研究の方法が伝統的な文の構造を解明する理論研究から言語形式の文法と意味を中心とした記述文法を経て、文法教育にもその知見は利用されている。また、対照言語学、誤用研究、中間言語、言語類型論のような応用言語学への発展は言語研究との関連性、外国語教育の必要性から考えても自然な流れである。さらに、今回の調査では具体的な論文の紹介はできなかったが、伝統的な研究領域の「文」レベルの文法研究が「談話」レベルへとその領域を広げている動きも見られた。これらのいくつかの要因が絡まって、文法論文の減少は文法そのものを研究するという方法から文法を利用した研究への移行という流れとして解釈できる。日本語教育における文法教育、誤用分析、中間言語・第二言語習得を含め、コミュニケーション研究などの分野でも文法は活用されている。

このように考えると、文法の研究単位として「文」というものも改めて考える必要がある。私たちが実際にことばを発するときには、単一の文を用いて発話をするよりは、ほとんどの場合、話し手と聞き手とのやりとりの中で行われる。たとえば、話しことばでは話し手と聞き手の間で成立する文脈や場面の中で互いに会話を通して行い、書きことばでは文脈・テキストを考慮して行うのが普通である。この意味で、これからの文法研究は談話・テキストを考慮した研究へ拡大していくものと思われる。

【参考文献】

- 天野みどり(2020)「特集 2018年・2019年における日本語学界の展望 文法(理論・現代)」『日本語の研究』第16巻2号, 日本語学会
- 韓国日本語学会「文法研究の現状と展望」(鄭相哲2017, 李景洙2019)
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える—』スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦(1975)『意味論』大修館書店
- 生越直樹編(2002)『対照言語学』東京大学出版会
- 奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

9) 韓国においては(魚秀禎(2020)「日本語書き言葉コーパスとしてのBCCWJについての考察」『日本語文学』89, 韓国日本語学会)があった。

- 景山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店
- 北原保雄(1996)『表現文法の方法』大修館書店
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」国立国語研究所『研究報告集3』
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 小泉保(1993)『日本語教師のための言語学入門』大修館書店
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(1994)『動詞の研究』むぎ書房
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語編』岩波書店
- 中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄編(1991)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- 日本語文法学会編(2014)『日本語文法事典』大修館書店
- 野田尚史編(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 橋本進吉(1959)『国文法体系論』岩波書店
- 益岡隆志(1989)『命題の文法—日本語文法序論—』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 三上章(1953)『現代語法序説』入江書院 (くろしお出版1972年復刊)
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房
- 渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房
- Givón, T. (1982) Evidentiality and epistemic space. *Studies in Japanese*, 6:1.
- Langacker, Ronald W. (1986) An introduction to cognitive grammar. *Cognitive Science* 10
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*(Second edition). Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott(2003) *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge University Press.

〈要旨〉

문법 연구의 동향과 전망

이 연구에서는 2019~2020년 한국에서 발행된 일본어 연구 관련 학술지에서 문법 논문을 취합하여 그 내용을 파악한 후 전체적인 현황을 제시하였다. 논문의 유형에 따라 단어의 의미·형태·통어에 관한 연구, 문법범주에 관한 연구, 한일대조연구, 일본에서의 문법 연구의 동향으로 나누어 그 내용과 특징을 기술하였다.

한국에서의 일본어 문법 연구는 이론적 연구와 더불어 문법현상을 기술하는 방법론을 포함해 대조연구나 오용분석, 언어유형론과 같은 응용 언어학적인 측면에서의 연구가 활발히 진행되고 있다. 이는 모어가 아닌 제2언어로서의 언어연구·외국어교육이라는 측면에서도 타당한 방법론이라 할 수 있다. 이번 조사에서도 한일 간 대조연구의 전통적인 단어의 1:1 대응 형식의 연구에서부터 어휘 레벨의 연구를 포함해 다양한 문법범주에 관한 논문을 찾아볼 수 있었다. 또한 문법의 연구영역인 문 레벨의 연구가 점차 담화 레벨로 그 영역을 넓혀가고 있는 움직임도 보인다. 이는 문법 현상 자체를 연구하는 방법에서 문법을 활용한 연구로의 이행이라는 흐름이라고 해석할 수 있으며 문법교육을 비롯해 오용분석, 언어습득은 물론 커뮤니케이션이나 화용론 등 타 분야에서도 문법은 활용되고 있다. 앞으로도 문법연구는 담화·텍스트를 고려한 문법론, 그리고 다양한 분야에서 문법을 활용하는 방식으로 발전해 갈 것이라 생각된다.

논문분야 : 통사론

키워드 : 문법론, 문법연구, 문법범주, 대조언어학, 언어유형론, 응용언어학

■ 장근수(張根壽)

상명대학교 교수

ksjang@smu.ac.kr

■ 投稿日 : 2020년	12월	30일
■ 審査開始 : 2021년	1월	12일
■ 審査完了 : 2021년	2월	15일
■ 掲載確定 : 2021년	2월	16일